

平城宮跡と平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1977年度において第102次から第109次までの28件に及ぶ発掘調査を行なった。平城宮内では、前年度に引き続いて推定第一次朝堂院地区の東第一・二堂の調査（第102次）を行い、東院地区では、旧東一坊大路路面と推定された地区で、第22次南調査地と第43次調査地の中間をつなぐ調査（第104次）を行い、東院成立に係る重要な知見を得た。

平城京内では、1976年度に続く左京三条二坊六坪の調査（第109次）で、1町域を占める宅地の全容を明らかにし、また、右京北辺坊（第103-16次）では、はじめて宅地の存在を実証したほか、大安寺西中房、薬師寺小子房・十字廊推定地などの調査を行い、見るべき成果をあげた。以下、主な調査の概要を報告する。

調 査 地 区	遺 跡・調査次数	調 査 期 間	面 積	備 考
6 A B G・B S・B T	平城宮 第102次	77. 4. 6～ 7. 12	37.20 a	第一次朝堂院
6 A L R	平城宮 第104次	77. 8. 4～11. 12	27.00 a	東院地区
6 A C D・C Q	平城宮 第106次	77. 6. 22～ 8. 1	7.36 a	佐伯門東方
6 A B N	平城宮 第107次	77. 11. 14～12. 27	11.30 a	佐紀池東方
6 A D B—A	平城宮 第103— 4次	77. 6. 15～ 6. 16	0.08 a	宮西北隅
6 A C N—F	平城宮 第103— 5次	77. 8. 26～ 8. 28	0.39 a	北面大垣
6 A C A—B	平城宮 第103— 9次	78. 1. 9～ 2. 8	9.00 a	佐紀池東北方
6 A L E	平城宮 第103—10次	77. 11. 8～11. 11	0.08 a	東面大垣
6 A B A—L	平城宮 第103—17次	78. 3. 1～ 3. 2	0.05 a	第一次内裏北方
6 A F L	平城京 第105次	77. 6. 28～ 7. 30	5.54 a	左京四条三坊一坪
6 A H B— I	平城京 第108次	77. 10. 4～10. 19	2.70 a	左京六条三坊
6 A F I	平城京 第109次	77. 11. 21～12. 27	11.00 a	左京三条二坊六坪
6 A F I—S・R	平城京 第103— 1次	77. 5. 9～ 6. 2	9.00 a	左京三条二坊七坪
6 A A N	平城京 第103— 2次	77. 5. 9～ 5. 14	0.21 a	平城陵北方
6 B F K—P	平城京 第103— 3次	77. 5. 17～ 5. 18	0.20 a	東二坊坊間路
6 A G A—M	平城京 第103— 6次	77. 9. 26～ 9. 28	0.33 a	右京一条二坊三坪
6 A G A—E・J	平城京 第103— 7次	77. 10. 17～11. 12	8.00 a	右京一条二坊一・二坪
6 A G J	平城京 第103— 8次	77. 12. 9～12. 16	0.24 a	西一坊大路側溝
6 B F K—U	平城京 第103—11次	77. 11. 9～11. 10	0.03 a	東院東方
6 B K A	平城京 第103—12次	77. 12. 2	0.05 a	海王寺旧境内
6 B F K—P	平城京 第103—13次	77. 12. 5～12. 6	0. 3 a	東二坊坊間路
6 A G A・G G	平城京 第103—14次	78. 1. 9～ 3. 25	5.00 a	西一坊大路溝
6 A F J	平城京 第103—15次	78. 1. 31～ 2. 14	0.90 a	東一坊坊間路
6 A G R	平城京 第103—16次	78. 2. 28～ 4. 1	13.00 a	北辺坊
6 B Y S	薬師寺	77. 11. 14～11. 26	1.20 a	東僧房北方
6 B Y S	薬師寺	78. 1. 7～ 4. 6	7.49 a	西小子房・十字廊
6 B D A	大安寺	77. 10. 17～10. 25	0.77 a	西中房
6 B H R	法隆寺	77. 8. 19～ 8. 24	0.24 a	西大門脇番所跡

1. 平城宮跡の調査

推定第1次朝堂院地区の調査（第102次） 調査地域は第97次調査地の南に接し、東第一・二堂跡推定土壇を2ヶ所含んでいる。この地区の地形は推定第1次・第2次内裏地域からのびる2つの低丘陵の間を南北にのびる浅い谷筋にあたり、東南にむかって緩やかに傾斜する。遺構はこの谷筋を埋めたてて造営されている。検出した主な遺構は建物2棟、掘立柱塀3条、築地塀1条、溝10条などである。これらの遺構は整地層によって4期に分けられる。

第1期 第1整地層に造営された遺構でSD3765、SA8410がある。SD3765は素掘りの南北溝で、幅2～2.5m、深さ0.6mである。推定第1次朝堂院の想定中軸線から東に約103m（340尺）の位置にあり、調査区を南北に貫いて南に延びる。溝中には2層の堆積がみられ、下層は青灰色砂層、上層は暗黒灰粘土層である。遺物は埴輪片が若干出土したのみである。

SA8410はSD3765の東17.5mにある掘立柱掘形列である。10尺間隔で、19間分を検出し、さらに南に延びている。柱掘形は深さが約0.4mと浅く、底面の凹凸が激しく、柱痕跡がないことから、掘形だけで計画変更をしたものと思われる。北から10間目、11間目の掘形から木簡が各1点出土して、うち1点は記載内容から和銅年間に比定される。

第2期 第2整地層に造営された遺構でSX8559・8560、SA5550A、SD3715がある。

SX8560はSA5550と重複し、調査区の南北を貫いて土塁状に築かれる。幅1.5m、高さ0.35mあり、発掘区南端近くで東西方向に走るSX8559とつながる。SX8559は幅1.8m、高さ0.3mで、西端はSB8550の基壇の掘込地業で壊され、SD3765上には存在しない。

SA5550Aは推定第1次朝堂院の東面を画する塀である。SD3765の東4mにあり、推定第1次朝堂院の想定中軸線から東約107m（360尺）の位置にある。第41・97次調査分と合せて南北46間分（137m）を確認した。柱間寸法は10尺。掘形は一辺約2mで、深さは1.2mである。第97次調査ではSA5550A・B・Cの3期を想定し、塀→築地一塀の変遷を考えたが、今回の調査でSA5550CはSA5550Aの柱抜取穴であり、築地基壇と考えたSA5550Bは塀SA5550Aの基壇盛土であることを確認した。柱抜取穴からの出土軒瓦は全て藤原宮式であった。

SD3715は推定第1次朝堂院と推定第2次朝堂院の間を流れる南北大溝で、SA5550Aの東17.5mにある。幅2～3m、深さ約1mである。奈良時代を通して存続する。上・下層の2期に分れ、下層溝は紀年木簡の出土状況から、その改修の時期を天平初年頃におくことができる。上・下層溝とも土器、瓦の出土は少なかった。

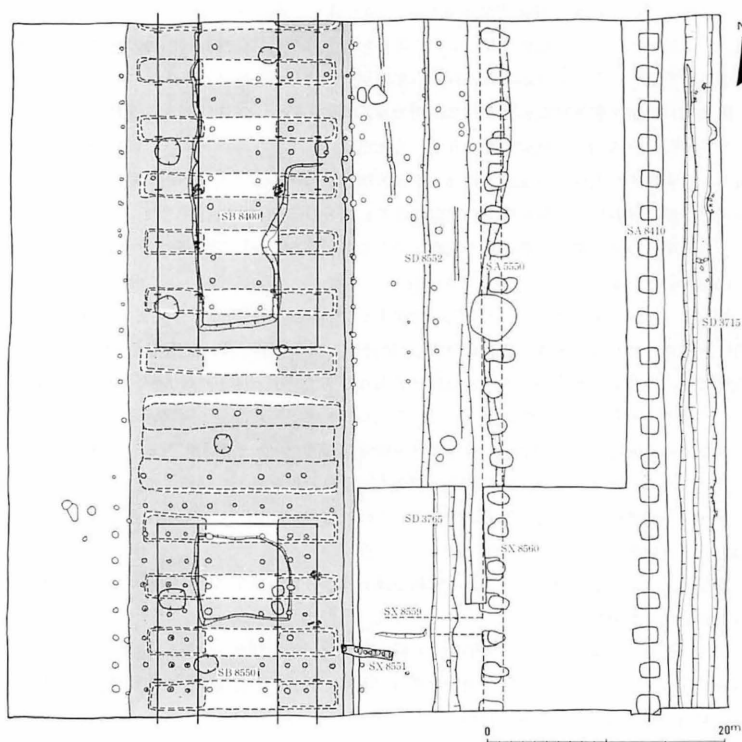
第3期 第3整地層に造営された遺構で礎石建物SB8400・8550、築地塀SA5550B、溝SD8552などがある。

SA5550Bの基壇積土は、SA5550Aの柱を抜いた後に粘質土、砂質土で積まれる。積土は西縁で良く残っていたが、東側は明治以降の用水路で壊され、築地本体の幅は確認できなかった。築地西縁に沿って雨落溝SD8392がある。幅0.4m、深さ0.1mである。

SB8400は第97次調査に引続いて、基壇積土を検出した。その南は9m途切れて、SB8550

の基壇積土がさらに続く。東西幅は19.6mであり、積土上面で礎石据付痕跡8ヶ所と足場穴を検出した。礎石据付痕跡の遺存状態は悪いが、南北約4.5m、東西約3.5m間隔に根石が並び、掘形の底は基壇掘込面より0.5m程上面にある。足場穴は15尺間隔で南北方向に柱筋を揃え、基壇外で一部に重複がみられる。新しい足場穴はS B 8400の部分補修のためと考えられる。基壇地業や足場穴、礎石据付痕跡の配置によって、S B 8400は東西約19.6m、南北約50mの基壇上に桁行10間15尺等間、梁行4間11.5尺等間の礎石建物を想定できる。S B 8550はS B 8400の南50尺の間隔を置いて南に桁行3間分検出し、さらに南に続く。S B 8400と同形式で柱間寸法が等しく、同様の足場穴を検出した。第97次調査で検出した礎石の高さは約1mあり、今回検出した根石のレベルが地業面から0.5m程であることから、基壇高は約1.5mと推定できる。階段や地覆石は後世の削平により痕跡はみとめられなかった。

基壇築成状況は数ヶ所にトレンチを設けて追査し、複雑な地下地業を行なっていることが分



第102次発掘遺構図

った。まず基壇まわりと梁行柱筋を布掘りし、黄褐色土を入れて版築状につき固め、さらに掘残し部分も棟通りの幅約6mを除く両端の坪掘りを行い、暗褐色土を入れて版築状につき固める。この地業はS B 8400、S B 8550とも一連で行なっているが、兩建物基壇の中間だけは掘残し部分を全面に掘込み、版築を行なっている。2段階に分けて行なったようにみえる地業のうちで、はじめの布掘り地業は南北方向で各16尺間隔となり、基壇上面の残存根石列から復原できる桁行柱間15尺と異なっている。この相違についてはなお検討の余地があるが、当初、桁行柱間を16尺等間で計画していた建物を、地下地業の段階で何らかの理由によって当初の計画を変更し、掘残し部分も加重の少ない棟通りを除いて坪掘地業を行なったものと考えられる。

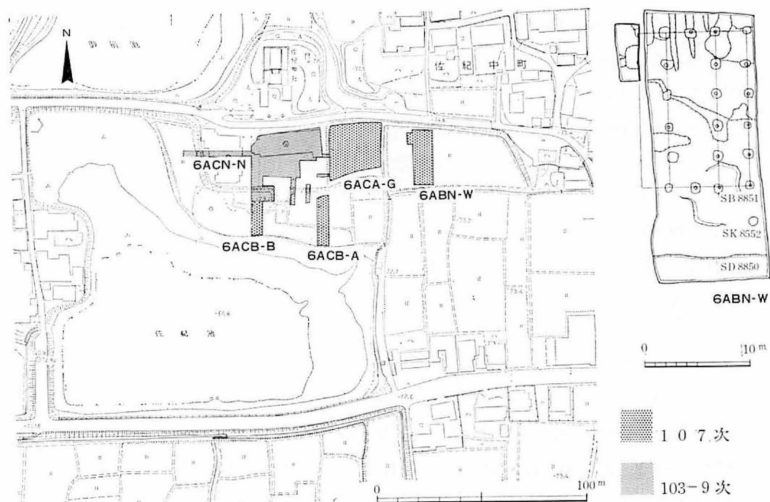
S D 8552は調査区の中央を南北に貫く幅0.7m、深さ0.25mの素掘溝で、規模は小さいが築地から基壇建物までの区画の排水溝と考えられる。S D 8552の東西縁に沿うS A 8553は柱間隔が一定せず南の方で消滅する。

第4期 S B 8400・S B 8550廃絶後の時期である。第97次調査でS X 8390とした瓦を多量に含む整地層（第4整地層）と同一期で、出土遺物から平安時代以降とみられる。S X 8551は方約0.5m、厚さ8cmの凝灰岩切石を東西方向に敷並べたもので、性格は不明である。

遺物 土器・瓦・木製品・木簡などがある。土器は調査区全体としては量が少ない。主にS D 3715から出土しており、平城宮Ⅱ～Ⅴ期（725～780年頃）が主体を占める。瓦は軒丸瓦299点、軒平瓦250点の他に丸瓦が多量に出土した。大半が整地層出土である。軒丸瓦、軒平瓦では全出土数の約80%がⅠ・Ⅱ期（708～745年）の瓦である。S A 5550Aの抜取穴から藤原宮式の瓦が出土しているが、これらはS A 5550Aに葺かれたものと考えられる。木製品は全てS D 3715から出土した。多くは棒状・板状品であるが、人形・杓子・筭・箸・礎板などがある。木簡はS D 3715、S A 8410から総数30点出土した。S D 3715の木簡出土層位は第97次調査で多量の木簡を出土した層位と同一で、天平5年の年紀のある木簡が1点出土している。S A 8410の柱掘形出土木簡は和銅年間のものと考えられる。

まとめ 第1期は和銅年間の平城宮造営当初の時期にあたる。S A 8410は宮中軸線からの距離が約120m（400尺）あり、当初東西800尺を区画する塀として計画されたが柱掘形の段階で計画変更し廃絶されたものと思われる。第2期は霊龜～養老年間に相当する。S A 5550Aは基壇つきの掘立柱塀で、のちに抜取られて築地塀に改められている。第3期はS A 5550Aを築地塀に建替え、S B 8400・S B 8550の地業を行なって朝堂建物を建てる。朝堂建物を神亀年間におくことは第97次調査の知見と矛盾せず、宮廃絶まで存続したと考えられる。

佐紀池東地区の調査（第103—9次、第107次） 調査地域は昨年度に調査（第101次）を行なった佐紀池の東にあたり、発掘面積は約2000㎡である。遺構は6 A B N—W区と6 A C B—A区で掘立柱建物1棟、溝1条、土壌9基を検出したが、それ以外の地区は後世の掘乱を受け、奈良時代の遺構は現存しない。掘立柱建物S B 8851は桁行5間、梁行4間の東・西庇をもつ南北棟建物である。柱間寸法は桁行10尺等間、梁行7.5尺、東庇の出10尺、西庇の出8尺である。トレン



第103-9次・第107次発掘調査地区

チ南端で東西溝 S D 8850 の北半部を検出した。この溝は大膳職の北を区画する溝とみられる。

遺物 瓦・土器が出土している。瓦は S D 8850 から平城宮Ⅲ期 (745～756年) の軒丸瓦 6282 型式が 2 点、軒平瓦 6721 型式が 4 点、6684 C 型式が 1 点出土した。土器は小片ばかりであったが、その内に硯部と脚台部 (径 28.5cm) を一連で成形する大型蹄脚硯 B が 1 点ある。

佐伯門東方の調査 (第106次) 第25次調査で検出した 宮内道路の東延長部の確認を目的として佐伯門の東方約 230m の地区、約 750㎡を発掘調査した。検出した主な遺構は溝 4 条、掘立柱建物 1 棟、折敷埋置施設 1 基などである。

S D 8844 は素掘りの東西溝である。最大幅 1.1m、深さ 0.25m で、東半部は中・近世の井戸で分断されている。S D 8820 は幅約 2.0m、深さ 0.3m の素掘りの東西溝で、佐伯門中軸線に沿って東に流れる。東西溝 S D 8810 は削平が著しく東方で途切れている。S D 8830 は S D 8820 に合流する南北溝で、南は土壌で切られるが、S D 8844 に接続するものと考えられる。

S B 8800 は東西 3 間、南北 1 間以上の掘立柱建物で柱間寸法は東西 8 尺、南北 10 尺となる。S X 8845 は S D 8820 の溝底で検出し、小さな土壌内の底・側面に瓦を置いて折敷を固定した施設である。S X 8843 は発掘区南部で検出した H 字状の溝状遺構である。遺物は皆無で粘土と砂質土が薄い互層をなしていた。

遺物 土器・瓦・木製品などが出土した。土器は出土量が少ない。S D 8820、S D 8844 出

土の土器は平城宮Ⅲ期～Ⅴ期(750～780年頃)に比定できる。瓦は軒丸瓦6点、軒平瓦8点、面戸瓦は蟹面戸で藤原宮式の特徴を備えている。木製品はSX8845の折敷1点と板状木製品破片4点がSD8820から出土している。

まとめ 発掘区は水路で南北に分断され、かつ様相が異なっていた。SD8844とSD8820の間は周辺に比べ地山面が高く、ここに築地を想定すれば官衙ブロックを区画するものと考えられるが今回の調査では当初目的とした道路敷らしい遺構は検出されなかった。

東院地区の調査(第104次) 調査地域は第22次南地区と第43次地区の間にはさまれた東院地区である。谷筋の低湿地にあたり、遺構の多くは整地面上で検出した。

主な遺構は掘立柱建物21棟、掘立柱塀15条、栗石盲暗渠4条、溝45条、長方形土壇1基、井戸1基などである。これらの遺構は大きくA～Eの5期に分けられる。

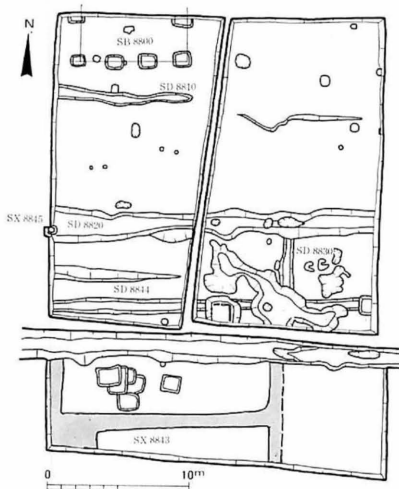
A期 平城宮造営前後の主として溝で構成される時期で、前後2期に分れる。はじめは東西方向の盲暗渠SD8601・8602・8603・8604の4条が、発掘区のはほぼ中央を南北に縦断する素掘溝SD8585に連なり、発掘区東北部でこの溝と合流する素掘溝SD8586とかならる。平城宮造営前と考えられるが、その性格は明らかでない。

次に発掘区の北東から南西に走る斜行溝SD8600と、発掘区北半中央に深さ30～40cm程の長方形土壇SK8630、およびその北辺から北にのびる南北石敷溝SD8645が造られる。

SD8600は両岸に残存状態の良好な護岸用シガラミがあり、埋土中からは多量の土器・木簡が出土した。後に詳述(32頁)するように、和銅年間の年紀のある木簡が9点あり、土器は平城宮Ⅰ・Ⅱ期に属するものが主である。また、SK8630の埋土からも和銅・霊龜の年紀のある木簡や平城宮Ⅰ・Ⅱ期の土器が出土していることから、A期後半期の遺構の時期は平城宮造営当初から天平初年頃までに限定できる。

B期 前期の溝・土壇を埋立て、全体に亘って整地を行う。発掘区西辺を南北塀SA3237で区画し、さらに、東西塀SA8574・8576で発掘区を南北に3区画に分割して、各区画内が南北棟の掘立柱建物SB8570・8571・8578・8580・8582・8618で構成される時期である。

SA3237は第22次南調査区から続き、東院地区の西辺を限る塀と考えられる。南北3区画の



第106次発掘遺構図

うち、北の区画には大規模建物を配し、中間区画では発掘区東辺に南北塀 S A 8575 を設けて方 60 尺の区画とし、南区画では S A 8575 をさらに南に 2 間分のばして S B 8571、およびその南の東西塀 S A 8572 とともに、南区画をさらに小さく分割するなど、官衙的な要素の強い機能的な配置計画が施されている。

B 期の廃絶時期は、S B 8580 の南妻柱抜取穴出土の紀年木簡から天平末年頃と推定される。

C 期 前期の遺構は S A 3237 の西に沿う南北溝 S D 8605 を除いて一掃され、同じ規模・平面形式の東西棟建物 S B 8590・8591・8592・8593・8594・8595 の 6 棟が、等間隔を置いて南北に整然と配置される。建物列の西側は S D 8605 で、東側は掘立柱塀 S A 8577、北側は S A 8596 で区画される南北に細長い官衙ブロックである。S A 8596 の北約 16 m には S A 8597 が並行し、両塀間は道路敷と推定される。

D 期 発掘区西寄りの、東一坊大路西側溝の北延長上に当る位置に南北大溝 S D 3236 が造られ、発掘北端と中程で、東西石敷溝 S D 3229・8620 が S D 3236 に合流し、これら 3 条の溝によって、当発掘区は 3 区画に分割される。S D 8620 の約 12 m 南に並行する東西素掘溝 S D 8624 との間は遺構がなく、南北の官衙を分ける道路敷と考えられる。道路敷の北には東西棟建物 S B 8632・8640、道路敷の南には南北棟建物 S B 8610・8612、南北溝 S D 3236 の西縁に南北棟建物 S B 8609・8638 がある。南ブロックの S B 8610 は発掘区の南にのびる桁行 7 間以上の建物で、桁行に 2 間、1 間の単位で 5 室に間仕切られている。

S D 3236 はその堆積層位は 3 期に分かれ、下層から天平勝宝～宝亀 6 年の年紀のある木簡が 6 点出土し、上層からは平城宮 V 期の土器が出土している。また、北ブロックの S B 8680 はのちに廃棄されて、井戸 S E 8679 が造られるが、この井戸埋土からも平城宮 V 期の土器が出土して、D 期の廃絶は奈良時代終末期にあてることができる。

E 期 奈良時代終末期の遺構を全面バラスで覆った時期である。このバラス面からは平城宮 V～Ⅶ期の土器と、少量ではあるが中世の青磁・瓦器・灰釉陶器が出土している。S B 8613 はバラス面からは検出できなかったが、柱掘形出土の土器形式（平城宮Ⅶ期）からこの時期に属するもので、また、柱掘形の形状等から S B 8611・8637 も同時期と思われる。

遺物 300 点を越す木簡をはじめ、多量の土器・瓦・木製品・金属類が出土した。特に S D 3236・8600 から出土した木簡・土器は東院の拡張時期を考察する上で貴重な資料である。

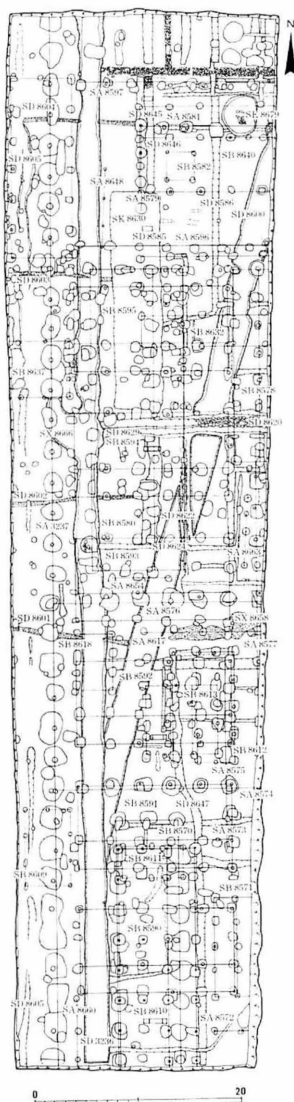
軒瓦の出土総数は 635 点あり、6282-6721 型式が大多数を占める。土器の出土量も豊富で S D 8600 堆積土中出土の唐草文を篋書きした須恵器蓋や、同様な唐草文の鉢形杯などがあり、また、S D 3236 からは墨書土器 175 点、二彩鉄鉢 9 点、黒漆塗土師器 1 点、線刻土器 18 点、土馬 1 点が出土した。両溝からは木製品・金属器も数多く出土している。

まとめ 当地区はこれまで、平城宮創建当初は東一条大路の道路敷と考えられたが、斜行溝や長方形土壇の存在で、なお今後に残すこととなった。また、天平末期以降は東院地区はかなり建物密度の高い官衙地区として機能していたことが明らかとなった。

第104次時期別遺構配置図

時期	遺構番号	方位	規模 (桁行×梁行)	柱間寸法(尺)		
				桁行	梁行	底
B	S B8570	南北棟	8間以上×2間	10	10	—
	S B8571	南北棟	4間×2間以上	8	?	7
	S B8578	南北棟	7間×2間以上	9	?	8
	S B8580	南北棟	11間×3間	9	10	9
	S B8582		1間×1間	9	9	—
	S B8618	南北棟	3間×2間	6	6	—
C	S B8590	東西棟	5間×3間	10	9	9
	S B8591	東西棟	5間×3間	10	9	9
	S B8592	東西棟	5間×3間	10	9	9
	S B8593	東西棟	5間×3間	10	9	9
	S B8594	東西棟	5間×3間	10	9	9
	S B8595	東西棟	5間×3間	10	9	9
D	S B8609	南北棟	3間×2間	8	7	—
	S B8610	南北棟	7間×3間	10	8	9
	S B8612	南北棟	4間×3間	9	7	8
	S B8632	東西棟	4間以上×3間	10	9	10
	S B8638	南北棟	6間×2間	10	10	—
	S B8640	東西棟	4間以上×3間	10	9	10
E	S B8611	東西棟	2間×1間	10	10	—
	S B8613	東西棟	3間×3間	8	6	10
	S B8637	東西棟	2間以上×2間	8	9	—

第104次時期別建物遺構



第104次発掘遺構図

2 平城京の調査

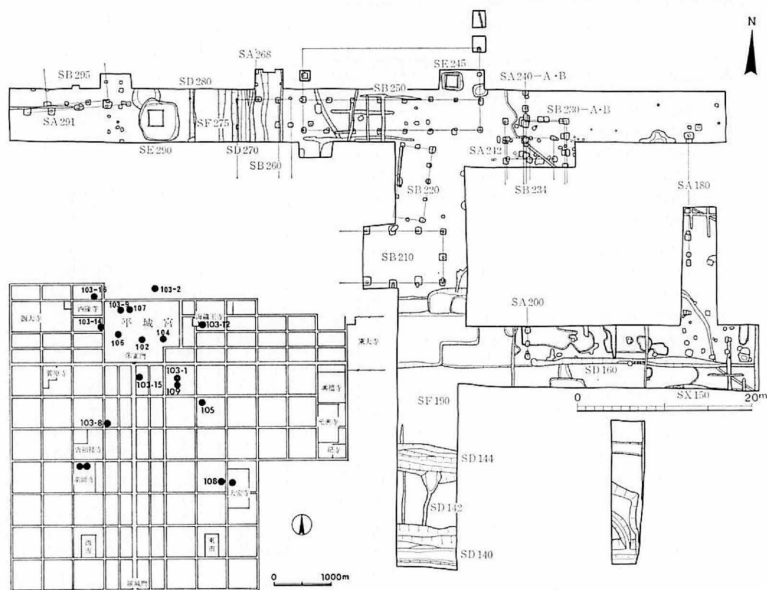
北辺坊の調査（第103-16次） 本調査は駐車場建設に伴う事前調査である。調査地は右京北辺坊の東南部にあたり、二坊二・三坪の宅地遺構および北京極大路の存在が予想された。検出した主な遺構は掘立柱建物8棟、塀9条、井戸2基、溝17条、道路2条、木組遺構、土壇などで大きくA・B・Cの3時期に区分できる。

A期 建物群は二坪と三坪の坪境付近に位置し、2坪分にわたる宅地が予想される。

調査区南部のSD160は幅1.1～0.3m、深さ0.4～0.2mの素掘の東西溝で、北京極大路計画線（平城宮西面中門心の北方1800尺）から北約14.6mにあり、これより南の遺構状況などから、北京極大路（SF190）の北側溝と考えられる。従ってこの溝より北側が宅地となる。

SB250は桁行7間、梁行3間、南庇付東西棟建物でA期の中心建物である。柱間寸法は10尺等間、庇の出は12尺である。この建物の両脇に南北棟建物SB230—A、SB260が配される。西側のSB260は東庇をもち、北側柱列をSB250の身舎南側柱列と揃える。北面に南北塀SA268がとりつく。東側のSB230—Aの北にも南北塀SA240—Aがとりつく。

SA180—Aは建物群の東方を限る5間の南北塀で、柱間寸法は10尺等間である。SB250の東側柱列から80尺の距離にある。



平城京内発掘調査位置図

第103-16次発掘遺構図

B期 南北小路 S F 275 がつくられ、宅地が東西に分割される。東側の宅地では S B 250, S B 260, S A 268 を廃し, S B 210, S E 245, S A 242 をつくる。S B 180—A, S A 230—A はつくりかえる。この時期にさらに改作があり, S B 230—B を廃して総柱建物 S B 234 を建て、その南北に塀 S A 240—B, S A 200 をつくる。小路西側では S E 290 がある。

南北小路 S F 275 は、南北溝 S D 270, S D 280 を側溝とし、溝心々距離は約 6 m (20 尺) である。S D 270 の埋土から奈良時代後半～末期の土器類が出土した。

S B 210 は B 期の中心的な建物と思われる桁行 4 間、梁行 2 間の東西棟建物で、柱間寸法は 10 尺等間である。柱抜取穴から奈良時代末の土器が出土している。

S E 245 は内法 1.3 m の方形井戸で深さは 2.6 m あり、井籠組の井戸枠が 8 段残る。S E 290 は内法 1.8 m、深さ 1.5 m で、井籠組の井戸枠が 3 段残る。これら 2 基の井戸埋土からは奈良時代末の土器が出土し、S E 290 の掘形からは奈良時代前期後葉の土師器が出土した。

C期 遺構がまばらで、建物の方位もばらつき、宅地の荒廃する時期である。桁行 4 間、梁行 2 間の南北棟建物 S B 220、東西棟建物 S B 295 があり、S B 295 の南にやや時期の遡る東西塀 S A 291 がある。S B 220 の柱掘形から奈良時代末の土器が出土している。この他、本組遺構 S X 150、溝 S D 142, S D 144、土壇があり、S X 150 の掘形、S D 144 の埋土から平安時代前期の土器類が出土している。

遺物 井戸 S E 290, S E 295 の埋土からまとまった遺物が出土した。S E 290 からは奈良時代末の土師器・須恵器のほか、軒平瓦 1、斎串 4、曲物底板 3、刀子柄 1 がある。S E 295 からも奈良時代末の土器類のほか、軒瓦 3、木簡 1、曲物側板 1、和同開珎 2、凝灰岩切石が出土した。この他、包含層から多量の円筒埴輪とともに、形象埴輪（家・盾）が出土している。

まとめ 今回検出した遺構は 3 期の変遷がある。その年代は、出土遺物から A 期を奈良時代前半期、B 期を奈良時代後半から末期、C 期を奈良時代末期から平安時代前期にあてることができる。A・B 期の遺構は平城京の造営方位とあわせて整然と配置されており、この地域が奈良時代前期から宅地として整備されたことがうかがえる。A 期の東西棟 S B 250 を中心にして両脇に南北棟を配した建物群は、二坪と三坪の坪境に位置しており、この時期には 2 坪分を占める宅地が推定できる。B 期になると南北小路ができて宅地は東西に分割される。ただ小路 S F 275 の位置は坊間小路計画線から西へ約 11.4 m ずれており、今後の検討を要する。また、第 23 次（平城宮北面大垣）調査で検出した東西方向の排水施設 S X 2333 を北京極大路南側溝とすると S D 160 との心々距離は 70 尺となる。

以上のように、今回の調査によって、従来不明な点が多い北辺坊地域の様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。

左京三条二坊六坪の調査（第 109 次） 調査区は昭和 50 年に実施した第 96 次発掘区の北面に接し、園池の北側を走る東西塀 S A 1500 から三条条間路（現大宮通り）までの区域である。検出した遺構は掘立柱建物 5 棟、溝 2 条、井戸 2 基、土壇などがあり、前回調査と同様、A 期、B 期に区



左京三条二坊六坪遺構配置図

分できる。

A期 底をもつ建物を中心にした4棟の建物、2基の井戸がある。SB 1570は南庇をもつ桁行5間、梁行3間の東西棟建物で、柱間寸法は9尺等間である。SB 1570の西6m(20尺)には建物SB 1571が南・北面の柱通りを揃えて並ぶ。調査区西端で東側柱のみ検出したが、SB 1570と同規模の東西棟と考えられる。SB 1570の東南には桁行5間、梁行2間の南北棟建物SB 1573がある。柱間寸法は桁行8尺5寸、梁行7尺等間である。西側柱列をSB 1570の東側柱列と揃える。SB 1570の北東にある建物SB 1552-Aは、前回調査に続き2間分検出した。桁行5間以上、梁行2間の東西棟建物で、柱間寸法は10尺等間である。この建物はほぼ同位置で

建替えられ、西から4間目で間仕切り、内部に棚状の施設がつくられる。南側柱列をSB1570の北側柱列と、西側柱列をSB1573の東側柱列と揃える。この時期の建物は、坪の中心からの距離が10尺単位で割りつけられる。SD1545は調査区北端にある素掘の東西溝で、六坪の北を限る築地の南側雨落溝と考えられる。SB1552—Aの南には井戸SE1610、SE1611がある。

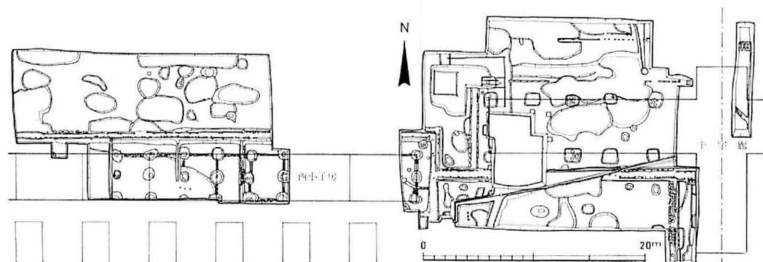
B期 これまでの建物・井戸を廃して、SB1574をつくる。SB1574は桁行5間以上、梁行2間、柱間寸法は10尺等間の東西棟で、前回調査の礎石建物SB1540と東面柱通りを揃える。南側柱抜取穴から平城宮Ⅳ期（天平宝字元年～神護景雲）の軒丸瓦が出土している。

遺物 瓦類・土器類・石製品がある。瓦類には丸瓦・平瓦の他に、軒瓦24点、面戸瓦1点がある。軒瓦は藤原宮式を含めⅠ期からⅣ期まであり、平城宮出土瓦と同範である。量的には、6285型式、6667型式を中心とするⅡ期（養老5年～天平17年）のことが多い。土器類には、土師器皿・高杯、甕須恵器皿・杯・高杯・盤・火舎・鉢・壺などがある。その他、土馬や将棋駒形の石製品（幅14.9cm、長さ19.6cm）で頂部に径0.6cmの円孔をもつものがある。

まとめ 今回の調査を含め、六坪は約35%が調査された。前回調査で、坪が園池を囲む塀により140尺で南北に3等分され、建物配置にも計画性があることが明らかになっている。今回の調査により、建物配置がA期には坪の中心から10尺単位で割りつけていることが一層明確となった。そして検出遺構の変遷は、園池を中心にした区域と軌を一にしており、両地区が一体となった計画の造営が行なわれていたことがうかがわれる。また、園池を中心とした区域が、曲水宴など特別な用途をもつ公的な宴遊の場と考えられるのに対して、今回検出した園池北方の建物群の性格は、坪内での位置や建物配置状況などから、六坪所有者の家政機関にあたり、園池の管理・運営が行われていたとみられる。

薬師寺西小子房・十字廊の調査 本調査は伽藍の復原とその変遷を明らかにするとともに、境内整備計画の資料を得る目的で、薬師寺の委嘱により行なった。

西小子房 西小子房は昭和49年の西僧房地区の調査で一部検出し、その位置・規模について明らかにしている。今回の調査区は、前回発掘区の北に接する区域である。西南側は中世の沼地でかなり破壊されていたが、東北側は焼土・木炭が厚く堆積し、遺構の保存状態は良好であ



薬師寺西小子房・十字廊発掘遺構図

った。西小子房の東端部と第3房・第4房・第5房の間取を明らかにするとともに、2度の火災を受けていることが判明した。

再建前の各房は桁行2間(20尺)、梁行2間(14尺)で、土壁で仕切り、さらに中央で東西2室に分割している。中央柱西側の床下には木樋暗渠が南北に通る。間仕切壁の地覆は、平瓦を両側に立て、その間に瓦を重ねたもので、大房と同じ工法である。

この建物は焼亡後、同位置に同規模で再建されるが、再度火災をうけ廃棄されている。房境には赤く焼けた幅15cmのスサ入り土壁が高さ5cmほど残っていた。また第3房・第4房では房内の北半を東西2室に間仕切る土壁が残り、北壁は再建前の地覆より6cm程北に寄せている。木樋暗渠は廃棄され、木樋に瓦をつめて盲暗渠状にしている。

小子房北側の雨落溝の側板は出土遺物・埋没状況からみて、小子房廃絶後に改修されたもので、当初は素掘の雨落溝である。溝の北側には瓦溜めの土壌が散在している。

2度目の火災は第3房床面出土の土器から10世紀後半と考えられ、「薬師寺縁起」にみえる天禄4年(973)の火災にあてることができる。また最初の火災は盲暗渠掘形出土土器の型式から、天禄4年よりさほど遡らない時期と考えられる。

十字廊 十字廊は「薬師寺縁起」によれば東西14丈1尺、南北5丈6尺で食殿ともよばれ、天禄4年の火災の失火元である。今回の調査で十字廊は食堂の北方に西半分を検出し、「薬師寺縁起」の記載通り平面十字形の建物であることを確認した。

基壇は地山上に茶褐色土を30cm積みあげ、凝灰岩切石を地山上に直接立てて基壇化粧としている。基壇上面は後世の攪乱を受けているが、礎石裾付痕跡が残り、建物規模を知ることができた。伽藍中軸線で折り返して復原すると、十字廊は桁行11間で、柱間寸法は中央間15尺、脇間14尺、次間13尺、端3間各12尺となる。梁行は2間で柱間寸法は8尺5寸等間である。南側柱列は西小子房の北側柱列と柱筋が揃う。桁行中央間から南に3間(柱間寸法10尺等間)の張出しがある。北への張出しは「薬師寺縁起」に記載された南北5丈6尺からすると1間分(9尺)と推定される。基壇のまわりには幅約40cmの雨落溝がめぐる。南雨落溝の側板は小子房から連続するもので、後に改修された時のものである。南の張出し部では、基壇の西側に食堂から続く幅40cmの石組雨落溝が走る。

基壇の西北隅に近接して井籠組の井戸があり、その掘形から奈良時代中頃の土器を出土している。井戸は十字廊の建設に際して西北方に移したものと考えられ、十字廊の創建を奈良時代中頃とすることができる。また、廃絶年代については、雨落溝、基壇上面の土壌から出土した遺物から10世紀後半と推定され、天禄4年の焼亡後再建されなかったものと思われる。

遺物 西小子房・十字廊地区の出土遺物には瓦類、土器類、金属製品がある。瓦類には多量の丸瓦、平瓦の他、軒瓦、緑釉垂木先瓦がある。軒瓦は軒丸瓦6276型式、軒平瓦6641型式が中心である。新型式の一つには径30.5cmの大型軒丸瓦がある。緑釉垂木先瓦は長辺15.7cm、短辺11.7cm前後の長方形をなし、方形の釘孔が2ヶ所ある。

土器類には土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・二彩陶器・緑釉陶器・灰釉陶器・中国製磁器がある。土師器が最も多く、その大部分が平安時代のものである。井戸出土の奈良時代中頃の甕の一つには「三宝」「人足」の墨書がある。この他、蹄脚硯、灰釉宝珠硯が出土した。

金属製品には銅製の螺髪・蝶番・白銅製簪・金箔・鉄釘がある。

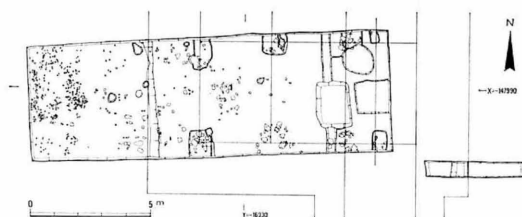
薬師寺東僧房北方の調査 本調査は現売札所の東方に、摩利支天堂が移築されるのに伴う調査である。検出した主な遺構は掘立柱建物2棟、井戸4基、溝2条である。建物2棟は奈良時代で、東西棟となるが平面形式は明らかではない。東僧房の北約50mで食堂にも近く、厨房関係の建物と思われる。井戸4基のうち1基は奈良時代、3基が平安時代末期に属する。奈良時代の井戸は方約1m、深さ1.7mで井戸枠は残っていないが、木簡・瓦・土器・木器など多量の遺物が出土した。木簡は井戸の廃絶年代を示す「靈亀二年」銘を含み、総数233点をかぞえる。軒瓦はすべて本薬師寺式である。土器には土師器、須恵器、黒色土器があり、土師器皿の一つに「長集師」「罪」「證」、土師器甕の一つに「奈戸」の墨書がある。この井戸は薬師寺造営工事にかかわるものと推定される。

大安寺西中房の調査 本調査は大安寺小学校校舎移転に関連する渡り廊下建設に伴う調査である。調査地は大安寺小学校校庭内で、創建大安寺西中房にあたる。

西中房については、昭和38年、奈良県教育委員会が今回の調査区の北方で発掘を行なった調査では、前後2期の建物があり、前期は梁行3間、柱間寸法10尺等間、後期は梁行4間、柱間寸法8尺等間であることがわかっている。今回の調査でも2期の根石群を検出し、前期建物は桁行柱間寸法が14尺であり、基壇東西幅が44尺であることが明らかとなった。この根石の位置は、西中房北列南端1間分にあたると思われる。後期建物は南北に並ぶ根石2ヶ所のみ検出した。桁行柱間寸法は前期と同様14尺である。

また、調査区の一部掘り下げにより、大安寺創建以前の地表面と、盛土整地層を確認した。旧地表面は現地表下約1.4mの灰色粘土層上面で、この地区では1m以上にわたる盛土整地が行われている。旧地表面には大官大寺所用の再使用瓦と思われる大官大寺式軒平瓦、奈良時代前期の土器、木材の削り屑が堆積しており、大安寺造営に関する遺物として注目される。

今回の調査により、大安寺造営に関する貴重な資料を得ることができた。なお、調査結果は



大安寺西中房発掘遺構図

『平城京左京六条三坊十四坪発掘調査概報』（奈良市教育委員会、1978年3月）として公表し、これまでの調査の成果をもとに作成した「大安寺伽藍配置復原図」（縮尺2000分の1）を収録した。（土肥 孝・安田龍太郎）